主が共にいてくださる　　**詩篇 23 篇 1～6 節**

詩篇 23 篇ほど愛されている詩篇はありません。6 節しかない短い詩篇です。しかし、そこには私たちの人生を真に豊かなものにしてゆく秘訣が記されています。

１）羊飼いである主

ヘブライ語では神を「エル」「エロヒーム」と言いますが、それには「力ある者」という意味があって、神の全能が強調されています。聖書では、「エル」の他に学者たちが「ヤーウェ」と呼ぶ、神の固有のお名前があります。敢えて言うならその意味は「わたしは在るという者」です。ユダヤの人たちは、神のお名前を直接口にするのは畏れおおいと考え、「アドナイ」（わが主）と読み替えました。このお名前が出てくるところは日本語では新改訳が太文字の「主」で表しています。「エル」という神の名前は、神が人間を超えた力あるお方であることを表わしています。それに比べて「アドナイ」は、神が人間との関わりを持たれるお方であることを表します。確かにそうですね。主と呼ばれるためには、主ではない存在との関係で呼ばれるわけです。私は主です、王ですと言っても、他の人との関係があって言われるわけで、何に対してか分からないと意味がありません。今日の「主は私の羊飼い」とは、神なるお方が羊である私の羊飼いでいてくださるということです。

羊は自分の身を守るものを何も持たない弱い動物です。迷いやすく、決して賢くはありません。羊飼いなしには生きていけない動物です。羊飼いは、羊の一匹、一匹に目を留め、見守り、羊と一緒に野宿し、いつも羊といっしょにいて、その勤めを果たします。また、時には羊を狙う野獣と戦わなければなりません。この詩篇を書いたダビデは子どもの頃は羊飼いをしていました。その経験から、神と人との関係はまさに羊飼いと羊の関係と同じであると確信するに至りました。人は、神なしには、生きてはいけないのです。そして、いと高い神が、そんな人間のために、身を低くして、羊飼いの立場に立って、人と共におられ、人を養い、守り、導いてくださる。このことからダビデは神なるお方を「主は私の羊飼い」私にとって羊飼いでいてくださる主と呼んだのです。

２）羊飼いであるキリスト

さて旧約聖書で「アドナイ（主)」と記されているところは、新約では、ほとんどがイエス・キリストを指すものとして引用されています。「アドナイ（主)」とは私たちのただ中に、私たちと共にいてくださる神であり、それは、まさに、人となられた子なる神イエス・キリストのことなのです。イエスもご自分のことを「アドナイ」と呼んでおられます。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」（ヨハネ 8:58)。そして、「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」（ヨハネ 10:11）とも言われました。イエスははっきりと、「わたしこそ羊飼いなる主である」と言われています。しかも、「良い牧者である」と言われたのです。これは、旧約で預言されていたことが成就していることを意味しています。ですから詩篇 23 篇 1 節は「主イエスは私の羊飼い」とも読めるわけです。

イエス・キリストは、神が約束された「良い牧者」です。羊飼いがへりくだった仕事であるように、良い牧者であるイエスも、神の御子であるのに、へりくだって人に仕えられました。へりくだられたというのはこちらが評価するような意味で謙遜であったという意味ではありません。そこまで低くならないと人のために意味ある働きにならなかったということです。その低さは十字架に至るまでの低さであり、そこまでしないと自分の罪深さに気づかない人間の鈍感さということでもあるのです。私たちは言います。「何故そこまで低くなる必要があるのでしょうか？」しかしイエス様はこうおっしゃいます。「十字架まで低くならないとあなたの罪は完全には赦されないからです。」イエス様は、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」（マルコ 10:45）と言われました。その通り、ほんとうに羊のためにいのち

を捨てた「良い牧者」なのです。主イエスを信じる者は、この、まことの牧者のもとに、その牧場で守られ、養われ、導かれるのです。このお方以上の良い羊飼いは世にはありません。イエス様が牧者である牧場以上に安全な場所はないのです。ですからイエスが主であるなら何も乏しいことがないのです。

３）羊飼いによる満足

「私は、乏しいことがありません。」これは、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる大きな恵みです。聖書は、「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です」（テモテ第一 6:6）と教えています。毎日の生活で、文句と不満ばかり持っている人と、小さなことでも感謝している人とではどちらが幸いで心豊かか、言うまでもありませんね。しかし、人の心は何によって満たされるのでしょうか。もし「モノ」によって満たそうとしたら、誰も願ったものがすべて手に入るわけではありませんから、いつも不満を感じるようになるでしょう。たとえ、欲しいものを手に入れても、人の心は「モノ」では満たされませんから、満たされない心を満たそうとしてさらに「モノ」を求めるようになり、そして失望を味わうという悪循環に陥いります。

また、人の関心や注目を求めて、それによって心を満たそうとしても、いつも他の人がふりむいてくれるとは限りません。多くの人は、自分に関心をもってもらいたくて、人をコントロールしようとしますが、それによって、かえって人からコントロールされるようになります。人を気遣うあまり人の思いが気になってしまうということです。今は死語のようですが昔、心の不満度を「くれない度」と言ったりしていました。「子どもが言うとおりにしてくれない」、「こんなに大変なのに誰も私を助けてくれない」などと、「…してくれない」という言葉が多くなるほど、「くれない度」が高くなり、心が「紅（くれない）」に、真っ赤に、染まっていくというのです。改めて私たちは、何が私たちをほんとうに満たしてくれるのかを知る必要があるのではないでしょうか。

そのことを詩篇 23 篇はどう言っているでしょうか。羊には牧草が、水が必要です。しかし、詩篇は牧草や水が羊を満たしているとは言っていません。「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」（2 節）と言って、牧草を与え、水を与えてくださるのは主であり、私たちを満たしてくださるのは「羊飼いである主」なのだと言っています。「主は私の羊飼い」だから「私は、乏しいことがない」と言っているのです。目の前に食べ物や水が一杯あるから満たされるのではないのです。

4 節や 5 節で「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても…」（4 節）、「私の敵の前で…」（5 節）とあるように、私たちの人生の日々は、いつも「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」にいるようなものとは限りません。難しい問題に直面して途方にくれたり、不安に襲われたり、思わぬ苦しみにあったりすることもあります。この詩篇を歌うダビデの生涯はまさに厳しいものでした。若い日には前の王であるサウル王に嫉妬心から何年も命をつけ狙われました。壮年期には外国の侵略に手を焼き、晩年になってからは息子からクーデターを起こされ命を狙われ、身も心も傷つく経験をしています。まさに「死の陰の谷」を歩き、「敵」に取り囲まれるような日々でした。しかし、そのような中にあってもダビデは「私は、乏しいことがありません」と言いました。なぜそのようなことが言えたのでしょうか？　それはダビデは自分を取り囲むどんな状況の中にも、「主がともにおられる」こと認め、この主が私を守り、満たしてくださると信じたからでした。

４）主が共にいてくださる

では、病気になったら、必要なものが手に入らなかったら、どうなのでしょうか。それは、神の祝福を失ったことになるのでしょうか。神から見放されたことを意味しているのでしょうか。決してそうではありません。信仰を持つということは、どんな苦しみにも、トラブルにも、災いにも遭わないということではありません。どんなに信仰深い人でも病気になります。さまざまなトラブルに巻き込まれます。貧しくなることもあります。神が私たちをあらゆる良い物で満たしてくださることを、私たちは信じています。

しかし、だからといって、目に見えるものだけを求めてはいません。神は、乏しい時や困難な時も、私たちにお与えになります。しかし、目に見えるものに不足しているように思えるとき、それは、神が見えない霊的な祝福を私たちの魂に注いでくださっているときなのです。ですから、私たちも言うのです。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。」（4 節）「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」は、すべてが満たされ、守られている順調な時のことを表します。「死の陰の谷」や「敵」は、人生の困難な時のことを言っています。詩篇 23 篇は、どちらの場合でも、主が私たちを守り、支え、必要を満たしてくださると言っています。「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」（5 節）これは、神の恵みと祝福の豊かさをみごとに描いています。敵を前にして、すでに勝利の祝宴が準備されているのです。神は、私たちの頭に香油を注いで、大切な招待客として迎えてくださいます。神が信じる者に注いでくださる恵みは、ほんの少しではありません。「私の杯は、あふれています」というほどに、それはじつに豊かなものなのです。

そして、この恵み、祝福は「主が共におられる」ことから来ています。パウロはピリピ 4:11-12 でこう言っています。「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」どんな時にも満ち足りて、どんな境遇の中でも、それに縛られることなく、恐れなく生きると言うのです。その秘訣は何なのでしょうか。それは逆境に負けない強い意志を持つことでしょうか。順調なときに有頂天にならずに慎む謙遜さを身に着けることでしょうか。いいえ、そうではありません。パウロがいう「秘訣」は悟りや修業など、ほんのひとにぎりの人しか得られないものではありません。それは、誰もが手にすることができるもの、信仰によって受け取ることができるものです。ピリピ 4:13 にその秘訣が書かれています。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」順調な時も、逆境の時も、「私を強くしてくださる方」イエス・キリストが共におられる。これが、「どんな境遇にあっても満ち足りる」秘訣です。

「私の羊飼い」であるイエス・キリストが「共にいる」と言っておられるのに、なぜ、私たちは、恐れたり、これも足りない、あれも足りないと不平を言うのでしょうか。教会で何かの奉仕を頼まれて、「私は足りない者です。とてもそんなことはできません」と言う人がおられます。謙遜そうに聞こえますが、少し思い違いをしているようです。神のために何かをするのに、足りている人、十分な力を持っている人などどこにもいません。私たちはみな神の栄光に足りない者ばかりです。私たちが足りない者であることを一番ご存知なのは神です。しかし、神は、それをご存知でありながら、私たちを用いようとなさるのです。私たちに恥をかかせるためではありません。それは、私たちが自分の力で何事かを成し遂げたと言って、高慢にならないためです。人が褒め称えられないためです。イエス・キリストが私たちを用いて、ものごとを成し遂げてくださることを、私たちに教えるためです。神の栄光に足りない者を用いてご自分の栄光を表わす。これが神の方法なのです。

主は言われます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」（イザヤ 41:10）「わたしはあなたと共にいる」と言われる主の言葉を信じましょう。そして、信じているなら「わたしはあなたと共にいる」という言葉に、「あなたは私と共におられます」と言って、お答えしましょう。その時、私たちは、欠乏に替えて満足を、恐れに替えて平安を、弱さに替えて力を体験することができるのです。